

杜乃柞

秩父神社社報

柞乃杜(ははそのもり)

第 72 号

(大 祭)

令和7年12月3日



あらた
新しき

年の始はじまりの

初春の

今日降る雪の

いし重しけ寿詞とこと

悠仁親王殿下の成年式を言祝ぎて

秩父神社宮司 蘭 田 建

皇紀二千六百八十五年 令和七年の今年は日本国民として秩父市民として大変素晴らしい年となりました。
天皇陛下におかれましては、五月二十四日から二十五日にかけて全国植樹祭埼玉大会に行幸遊ばされました。植樹祭当日の二十五日には、秩父神社境内にて当社例大祭「笠鉾・屋台」を天覧い



た、多くが叶いました。これは当社にとつて、創建二千百有余年、始まって以来初の行幸であり、皇室を仰ぎ尊ぶ秩父神社職員一同、日本人として幸甚の至りであります。
そして悠仁親王殿下におかれましては、九月六日には十九歳の御誕生日を迎えられました。秋篠宮邸にて「冠を賜うの儀」から始まり、その後の「加冠の儀」では天皇皇后両陛下御臨席の下に、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御前で、加冠役が悠仁親王殿下に賜冠を加える(冠をお付けする)儀式、続いて賢所皇霊殿神殿に謁するの儀等の成年式がおそかに斎行されました。ここに四十年ぶりの男子青年皇族としてお立ちになりました事は、大慶至極に存じます。親王殿下におかれましては、これから成年男子皇族として、ご学業の傍ら本格的な御公務に取り組まれることとなります。今後はこの御公務によって、皇室と国民とのつながりがより一層強固なものと確信致しました。
万世一系の下、日本国民として「胸の玉梓に熱き想いを乗せるが如く」ここに改めて聖恩に感謝を申し上げ、御皇室の弥栄を心よりお祈り申し上げます。
さて国民の一人として、先の大東亜戦争において多くの犠牲者並びに戦没者の御霊をお鎮めする為に、日々大前に額づくばかりは言わずもがな。終戦八十年目にしてようやく日本の心、大和魂の胎動が始まったようにも感じ、故安倍晋三先生の遺志を継ぐ高市早苗政権が『今そこにある危機』と『未来あるこれから世代』に旭日の光を照らすことに、宮人一命を懸けて渴望する今日この頃であります。
氏子の皆様におかれましては、良き年を迎えられますこと御祈念申し上げます。

【宮司肖像写真】
第71回全国写真展覧会 奥田昇きもの写真大賞受賞『凛々と』
武藤芳行氏(前秩父写真館)

解説 秩父神社(70)

杉山正司

◆ 続・秩父神社を巡る刀剣(四) 伝来の仮説

そもそも神社に伝来した刀剣は、神前への祈願を目的とした奉納である。奉納用刀剣を改変することは、神社としても重大な理由があったはずである。神社において重大事とは何か。それは、重要な神事のためではないかと推測してみた。

神楽

まず社殿内で舞われる神楽で使うためではないかと考えた。社殿や神楽殿など、屋内で天井や柱などがあり、刀剣を振るう所作で、柱や楽人など周囲に刃先が当たる危険性があり、よりコンパクトにする必要があったのではないかと。宮司や神職の方々にも尋ねたところ、脇差を使用する神楽などは、現在当社には伝



井上氏の帯刀行列と神馬奉納の儀

わっていない。また古くも聞いたことがないという。

神馬奉納

ところが他の神事で、刀剣が関わる事があるという。例祭(秩父夜祭)の十二月二日に催される、「神馬奉納の儀」である。例祭では、二頭の御神馬が奉納され、屋台・笠鉾・神輿などと共に御旅所へ

向かう。この神事は鎌倉時代より続くといえられ、かつては丹党中村氏により奉納されており、現在では当社責任役員井上家によって伝統が継承されている。
当日は、袴に脇差姿の当主を先頭に御本殿に昇殿のち、宮司と杯を交わして、例祭に御神馬を奉納する奉告祭を執行する。ところが、当日の行列の写真を見ると、当主は大・小二振を差している。

このことを井上靖氏(秩父神社奉賛会長)に伺ったところ、参殿迄は大小を差すが、御本殿に上がる際には、刀は供に預けて脇差のみで宮司と対面しているという。井上氏は、大刀を差したまままだと行動が制限されて、社殿内で宮司と対面することは困難で、脇差が最適であるという。脇差のみで昇殿することについて、私の仮説に納得できるとおっしゃっていた。

例祭における神馬奉納の儀は、秩父神社において重要な



袴に脇差姿の井上氏、宮司と御本殿で杯を交わす

神事である。それまで神事に使われていた脇差に何らかの支障があったため、代わって社宝の勝光・宗光合作の脇差を、神事に扱いやすいように磨上げて、しかも折返銘として使われるようになったのではないだろうか。

あくまで私論ではあるが、名刀を改変することの説明はこれ以外にないと考えている。

(元埼玉県立文書館館長)



震災翌年の陸中山田祭のインタビュー調査
2012年9月17日岩手県山田町にて

先生のご尽力が無ければ成し遂げられないことでした。今でも國學院大學博物館の神道コーナーには四季の祭礼映像が二五種類近くも毎日上映されております。これは蘭田先生と私で生み出した調査研究の結晶として今も生きています。有難いことです。

愛・地球博の千年の森出展では、大変な苦勞がありました。社叢学会の仕事でありましたが、実質的には蘭田先生の情熱でやり遂げられた事業でした。大きな磐座を丘の上に持ち込む作業や四阿の建設資金、人員の動員、映像の製作など、ご令嬢の真木子さんには、映像に入れた和歌を曲にして歌っていただきました。秩父の御神輿も参加されていました。本場に一大事業、たつたのです。先生は「私が出す」とおっしゃいました。

先生の使命感と情熱がどこから来るものなのか、そばに居て、ただただ驚いておりました。

昨年のおみそか、突然の訃報に接し、驚きとともに、何かの間違いではないのか、かと思われました。居ても立つてもいられず、翌日、初詣で賑う人々の中を、蘭田先生宅に伺いました。穏やかなお顔で、眠っていらつしやいました。

「これまで本当に有難うございました」としかお声を掛けられませんでした。悲しみと同時に感謝の気持ちが湧きおこりました。

蘭田稔先生との思い出

國學院大學名誉教授 茂木 栄



「災害と宗教」シンポジウムの一コマ、蘭田先生と筆者
2012年11月1日カリフォルニア大学サンタバーバラ校にて

蘭田先生は、当時アメリカから帰っていらした直後に、「遊びの会」という祭りに、研究グループを主宰され、國學院大學の研究室で初めてお目にかかりました。私はまた、成城大学の大学院で民俗学を学び始めたばかりの修士課程の一年生。「遊びの会」へのお誘いを受け、参加させていただいたのが始まりでした。それから各地の祭礼や風土の調査に

蘭田稔名誉宮司は、私にとって学問研究の大先輩であり、人生の師であり、生き方の模範ともいえるべき先生でした。私は蘭田先生を宮司さんと呼びました。私にとつてはどの分野でも先生でした。ですから、表題を「蘭田先生との思い出」とさせていただきます。

大学院で民俗学を学ぶようになって、祭祀研究をされているアメリカの新しい新進鋭の宗教学者が國學院大學にいらつしやるといふ噂を、私は大学院の先輩からお聞きしました。当時は敬遠すべき怖い先輩で

同行させていただいて、先生の調査手法と研究構想を学ばせていただきました。日本はもとより、ヨーロッパ（西・東）での祭礼資料の収集の旅にも同行させていただき、研究の眼を開いていただきました。私がまがりなりにも大学で教鞭をとり、またも家庭を営むことができるようになったのは、蘭田先生が導いてくださったお陰です。目をつむれば、蘭田先生との厳しくも楽しい調査研究の数々が思い起こされます。

奄美群島全村の神社調査をした九学会連合の何度にもわたる困難な調査、やはり九学会連合の「風土」大和地方の式内社調査。これはのちに「大和の風土と神社祭祀」と題した論文になりました。古典と伝承と歴史、儀礼が構造的に再構成されていて、蘭田稔先生の偉大さを実感することとなりました。「いつ大和の風土構造を思いついたのですか？」と尋ねた時、「調査に入る時から考えていた」とお答えになりました。やはり古典に精通してないと日本の宗教風土の研究を深めることはできないことを痛感いたしました。

飛騨古川の祭礼とコミュニティの風土構造調査もいたしました。奄美群島集落の神社悉皆調査も行いました。調査の合間に、スケッチをしている先生がいらつしやいました。

また、西ドイツ・東ドイツ・ポーランド・フランス・スペインの祭り資料収集の旅。東西冷戦下の東ベルリンをさまよいながら、ヨーロッパの東西二〇〇キロの旅を成し遂げ、マルブルグの宿に戻った時、抱き合つて喜び合いました。深い絆で結ばれたように感じられた忘れられない冒険でした。

東日本大震災が被災してからは、いち早く被災地に駆けつけ、神社と鎮守の森の被害調査を始められました。復興の経過の観察調査を定期的に続けられ、神社という存在がいかに地域の防災と復興に資してきたかを明らかにすることにも、被災地域の復活を支援していらつしやいました。本年二月には被災神社の宮司さんに社叢学会でのご講演をお願いしたところでした。

そして、何より、先生とともに行なつてきた調査地の祭り・郷土芸能を映画やハイビジョンで映像作品として残すという仕事は、蘭田先

一つの時代が終わつたと思ひました。

蘭田稔先生！ 思い出することは無限にあります。一番言いたかつたことは、私は先生に対して、畏敬の念を抱きつつも、言葉には出さない優しさを、心から尊敬しておりました。

略歴

昭和三十五年	三月	東京大学文学部宗教学宗教史学科卒業
昭和四十年	三月	東京大学大学院人文科学研究所博士課程単位取得満期
昭和四十四年	四月	國學院大學文学部専任講師に就任
昭和四十九年	七月	カリフォルニア大学バークレイ客員研究員として渡米
昭和五十年	九月	國學院大學文学部助教授に就任
昭和五十六年	十月	秩父神社権禰宜を拝命
昭和五十九年	四月	日本宗教学会賞を受賞
昭和六十年	四月	國學院大學文学部教授に就任
昭和六十六年	四月	佐藤謙三賞を受賞
昭和六十八年	四月	秩父神社禰宜を拝命
昭和六十九年	四月	西独マルブルク大学客員講師として渡欧
昭和七十年	四月	秩父神社宮司を拝命 神職身分二級に叙せられる
昭和七十二年	五月	埼玉県神社庁秩父支部長に就任
昭和七十四年	七月	秩父神社教養部教授に就任
昭和七十六年	七月	京都大学総合人間学部・同大学院人間環境学専攻教授に就任
昭和七十八年	四月	神道宗教学会会長に就任
昭和八十年	三月	神職身分二級上に叙せられる
昭和八十二年	三月	埼玉県神社庁長に就任
昭和八十四年	三月	京都大学名誉教授の称号を受く
昭和八十六年	四月	神道国際学会会長に就任
昭和八十八年	二月	神職身分分級に叙せられる
昭和九十年	一月	伊勢神宮崇敬会代議員を委嘱される
昭和九十二年	四月	社叢学会理事長に就任
昭和九十四年	六月	秩父宮会会長に就任
昭和九十六年	八月	第十二回本多静六賞を受賞
昭和九十八年	三月	秩父神社宮司を退任
昭和九十九年	四月	秩父神社宮司を兼任（吉田） 秩父神社宮司を拝命
令和元年	三月三十一日	秩父神社名譽宮司の称号を受く
令和二年	一月	神本社より長老の称号を受く

【表紙歌解説】

新しき 年の始の初春の

今日降る雪の
いや重け寿詞

表紙の和歌は、万葉集の掉尾を飾る大伴家持の歌です。新年の元旦に滾々と降る雪のように良い事がたくさん降り積もることを願った予祝の歌になります。令和六年の大晦日に急逝した先代宮司が、親しい皆様への返信用として準備していた年賀状が絶筆となりましたが、その冒頭に記されていたのがこの和歌です。

「新しき」は形容詞「あらたし」の連体形で「あらたしき」と読みます。元来、年は「あたらしき」なるものではなく「あらたしき」なるものなのです。

これは日本人固有の時間感覚に關係します。一般に現代を生きる私どもの時間感覚は、「直線的時間」と呼ばれる感覚で、過去・現在・未来が一方に繋がつていて決して戻ることのない



円環的時間感覺に立つてイノチを捉えるならば、イノチは個々の有機体に等しく与えられているものであつて、やがて生き物としての寿命を全うし、死を迎えて形を失つても次の時代に連綿と引き継がれることを示唆しています。大河の水の流れのように、個々のイノチもまた遠い先祖から連綿と流れ、ムスビの神の靈力によつて新たな形を成すのです。

更にもう一つ、先代宮司が年賀状に書き残した言葉が次の通りです。

生命それ自身は決して死なない。

死ぬのはただ個々の生き物だけである。

この言葉は、ドイツ・ハイデルベルク大学の医学部教授として活躍されたヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼッカー博士が晩年著された『ゲシュタルト・クライス』の序文に残された言葉です。その本には「生命とは出生と死である」ということが書かれています。つまり、生命には必ずいつか死を迎えるということが内包されており、死もまた生命の働きであるということです。

例へそれが大切な人の死であつたとしても「私とあなた」といつた二人称的な關係の上に立つと、決してその人ひとりの死ではなくなるというこゝと。親しい者が亡くなるというこゝとは、單にその人が死んだということだけではなく、その集団を構成しているメンバーにとつて痛切な變化を被ることになることが分有され、この上なくアクチュアルな出来事として捉えるしかありません。

晩年、蘭田先生は「人間だけでない全生命に連なる靈性への畏敬」ということをテーマに、唯物論的な方向に流れる現代の価値観に対し警鐘を鳴らしてこられました。万物を生成する不可思議なムスビの力を、時にカミともホトケとも呼んで大切に祀る我が国の伝統的な靈的生命観をもつて、二十世紀を支配してきた物質文明への軌道を修正し、未来を生きる多くの人々に物心ともに豊かさをもたらす生命文明の実現に期待を寄せていらつしやいました。

令和二年夏の社報では、「自然万物の生きた靈性を目に見えぬ力ミ（神靈）とも感得する日本人古来の感性と、その感性を山川草木悉皆成仏と表現した日本仏教の智恵とを活かして（中略）万物共生みの生命文明構築をめざすべきではないでしうか」と呼びかけられました。先生の最後の教えとして深く心に留めるとともに、いつか時の輪の接するところで親しくご教授を賜うたく願つて止みません。

結びに、蘭田先生のご遺徳にあらためて感謝を申し上げますとともに、その御霊の平安を謹んでお祈り申し上げます。

國學院大學兼任講師・權禰宜 新井君美

梟だより



高橋信一郎社殿保存修理
委員会委員長のご逝去



委員長委員長がご逝去されました。高橋様は、昭和十二年十一月二十六日、秩父市中村町の高橋家に生を受けられました。大学卒業後の昭和三十六年より、家業である高橋組工務所（現株式会社高橋組）の代表にお就きになられ、その卓越したリーダーシップで社業発展の基を築かれますと共に、秩父地域の発展にも一方ならぬご尽力を賜りました。

平成六年には、全国山・鉾屋台保存会連合会専務理事にご就任され、その人望篤いお人柄は皆に慕われるところとなりました。その後、秩父商工会議所会頭や埼玉県社会保険協会副会長、また埼玉県文化財保護協会会長などの要職を歴任され、平成二十七年からは当

社社殿保存修理委員会の委員長にご就任になられ、事業完遂のため蔭に日向にご尽力を頂きました。茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

氏子青年会初代会長

今井奎吾様へ逝去



氏子青年会初代会長

今井奎吾さんを偲んで

氏子青年会賛助会大島耕造

秩父神社氏子青年会結成のために尽力した初代会長の今井奎吾様が十月二日に亡くなりました。悲しくて寂しくてとても残念です。

平成元年 藁田稔宮司の提唱する「秩父神社を中心とした街づくり」のもと請われて氏子青年会の結成をお願いされたのです。

今井様のもとに夏祭り、冬祭り

の屋台笠鉦町のお祭り大好き人間が集結して、連日連夜机を囲み真剣に協議を重ね、翌平成二年に結成の運びとなりました。

青年会の当初の活動は、秩父神社と関係の深い武甲山登拝を始め、観月コンサート等を行った記憶があります。その時の様子を思い起こすとき感慨深いものがあります。

結成以来三十有余年、会員の皆様が交流と親睦を深めて活動しています。それらをまとめ上げたのが今井奎吾様であり、その手腕は見事でした。今までのご活躍に感謝申し上げますと共に、ご冥福をお祈り申し上げます。

◆ 氏子青年会武甲山登拝

十月五日（日）氏子青年会恒例行事「親子で登る武甲山登拝」が

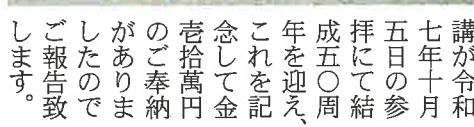


◆ 奉納報告

御嶽神社にお参りをして、思い出
の残る登山となりました。
来年も大勢のご参加をお待ちし
ております。



A large group of approximately 30 people, including men in suits and women in traditional Japanese attire, are posing for a group photo in front of a traditional Japanese building with a tiled roof. The group is arranged in several rows, with some individuals seated in the front. The building behind them has a dark, curved roof and is surrounded by greenery. The photo is taken outdoors on a paved area.



◆矢尾直秀様名誉顧問就任

矢尾直秀様には御鎮座二一〇〇年奉祝事業奉賛会会長職にご就任頂き記念事業並びに募財活動について格別なるご協力、ご賛助を賜りました。

既に所期の目的を終え、御鎮座二一〇〇年奉祝事業奉賛会は解散致しましたが、本事業の実現にあたり格別なるご高配を賜りました矢尾様のご功績を称え、「秩父神社奉賛会名誉顧問」にご就任頂きましたので、ご報告致します。

◆健康・長寿の桃守

せいおうぼ
西王母の三千年に一度しか実らない桃を三つも食べた東邦朔は、九千歳と長生きでした。この当社西面の彫刻にあやかり健康長寿の御利益をどなたでもいただけます。



初穂料 一〇〇〇円

◆秩父神社妙見講

自 令和 七年 七月
至 令和 七年十一月

九月六日 荒川妙見講

浅海忠講元外 百四名
九月七日 小鹿野講

逸見照三講元外 四十四名
九月七日 中村講

岩田雄一講元外 百四十三名
九月十四日 上町講

浜中啓一講元外 二百一名
十月五日 上宮地講

大島耕造講元外 百二十二名
十月十九日 中町講

若林章一講元外 百八名
十月二十四日 東町妙見講

木村普一講元外 七十九名
十月二十五日 桜木講

濱田雄司講元外 二十六名

【表紙解説】

この度の表紙絵画は、秩父市東町にお住いの中村珠己さんが第五十九回「郷土を描く児童生徒美術展」において、埼玉県知事賞を受賞した秩父市立花の木小学校六年生時の作品を掲載させて頂きました。「緑ゆたかな秩父神社」と銘打った作品は、題名の通り杜

十一月八日 野坂講

中村正義講元外 百四名
十一月九日 番場妙見講

今井明講元外 七十二名

本年より中町講若林章一様が新たに講元に就任されました。どうぞ宜しくお願い致します。

◆柞乃杜神前結婚式報告

秩父市上宮地町 今井和哉・絵理佳様

秩父市道生町 武藤秀英・葵様

東京都豊島区 佐藤 光・優奈様

埼玉県川越市 高橋拓哉・あかね様

秩父市大野原 今井健太・はるか様

埼玉県入間市 中村琢也・可菜様

本永く幸せなご家庭をお築き戴きますようお祈り致します。

の中の神社を感じさせる作品に仕上がっています。
ご本人によると「門の奥行きの色づかいを工夫しました。瓦の所に影を入れたり、柱の角の部分の少し濃くしたりしました。階段の所や看板などにも注目してみてください。」と述べられました。今後益々のご活躍を期待しております。

◆職員辞令

主典 吉田有臣 権禰宜を命ず
(十月一日付)

編集後記

■本社報が校了となる寸前の十一月九日、前禰宜であった新井直行嘱託の訃報が届く。昭和から平成と実に四十年余りを当社一筋に奉職された先輩である。心より御霊の平安をお祈りしたい。

■今回は先代宮司を偲ぶことを主題としたが、共に時代を歩まれた高橋信一郎様や今井奎吾様など懐かしい方々が次々に逝去された一年であった。戦後も既に八十年多くの先人たちの思いを次代へと継承すべく来る令和八年に向けて気持ちを新たにする年の瀬である。



※ 本報の用紙は再生マツト紙を使用しています。

令和七年(二〇二五)十二月三日

編集 秩父神社社務所

〒361-0044 埼玉県秩父市番場町一三

TEL 〇四九四 二二一〇二六二

FAX 〇四九四 二四一五五九六

印刷所 有限会社 拡文社印刷所

〒361-0044 秩父市東町二七一八